

盛久

昭和改行版
内十八

特 258 34
908 61

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80m 1 2 3 4 5

始



物258
908

盛久

(梗概) 平家没落の後主馬の判官盛久捕はれの身となり土屋三郎に送られ関東に下らんとする時、日頃信心を籠めたる京都清水の觀世音に詣で、最期の暇を乞ひ、やがて鎌倉に着き一も尚ほ讀經三昧の日を送りぬ。かくて盛久所刑の日となり由比の濱邊に引かれ行き一が此日頃讀經念佛の功德より不思議とも太刀取の振り上げ一太刀段々に折れて諸人の眼を驚かす所に頼朝公より赦免の使者あり盛久は御前に罷り出で舞ひ乍り、茅出度く赦されて退出一ぬ。



シテ 主馬判官盛久

ワキ 土屋三郎

ワキヅレ 太刀取

輿昇 二人

所 前 京都 清水

後 相模國鎌倉

季 春

盛久

あき
是も通禽歎の浦内よ仕へや。ち處乃
何事よくいぬじう馬比判官、盛久も、
丹後國成相寺よ深くみんで、ひ産ゆ
一をよむ案内者を以て安こと生捕
ゆ。只今関東へ出仕仕
いよ土を

廢よりべき事也。何事かくらひそ
て、唯今園東へ下まふは是れ涙も成べ。
清水の方へ纏をきて、路りとて、支了我
安き間乃に、まことに、西と東山の方
へ纏をきて、まことに、サシテ南寧や大慈大悲
乃観世音さへも葉ばへとかことわ誓

のま、一縛一念ねまのまゝまゝてや多
年ちぐの因縁縁をかんやあは清
名翁おひやいつゝ又、清水もれ花盛
日ゆるまもき名翁う耶、あよたてぬも
音羽山瀧津乞を人よびサシテ見
渡せば柳橋をあれませて錦と見るも

右の丸を、又いつうふと黒ひでの限りあ
きて、東あみとひきて我名なまきカク、我
をまづひくち馬せぬよまれ、世どよ隠
きあに身とて、思ひあ外の旅乃な
閑の東よかけ、汝白川を引浪のいは
ゆるべき旅あくを、寢は誰をう松坂や

四の宮河ゑ、四乃辻キヤ、是やげ行もゆる
を別ハキ、知はもあくぬも、トト
坂北閑トト、も今乃我を、もとめトト、
田の長橋トト、お渡り、立よ、トト、
の三年、魚ね、立よ、トト、
森トトを、もるや、トト、濃尾張、熱田の浦タタ

13

三

越えて、山の國よ清風も候
二種め入海因子
北浦おあてりれ、滿月の浦
士の根葉根山野の月
福金よ深に溝
と、曾仲よ乃
みてぢんあいをすう
中嶋上、こゝ
あまざり、山をまくわがまくうてば

関東よすゑぬ、酒年の夢も、ハ華やか也。
一すの老院、沙裏せ全室や古らは雲
升乃よそ、千世かと繋り、人を、
智あせなれや、も壁、山の雲
震実かほ身乃わひあり、かくて、
らへて人よ画を、よりハ天晴とう
疾

あき、
あきみゆがや、あきいもくや、^{アキ}盤久の
仰事、^{アキ}ん独云を作り、上素乃趣
あきよやさざやとなぬい、いよやけり去
をうみてゆ、^{アキ}ち在處としやばすへ
ゆ入りへね、まうるゆを、^{アキ}ねゆ
たり、^{アキ}さん作おるのは、^{アキ}ねゆすてゆ

へば大事の國人よりはまほり程よとく説
くやせとの爲事にはくひして、至事まで
い只今も独言にややくおうへて人ふ
画をさへたりよりはとく諭せきびや
とくまー事。ねづひてひよるふねづ言候
はる今後り わきいや四宣後は、晴りぬ取

うと、併出されてゆく。ねづ當時うゆる
殘情ふれぬまうて、ぬづ讀ひ、ぬもく
げ程乃清音志、やもやもとあこ又吳今
説せくまやまば、ぬづの爲あくみよ、一通
の念佛をも因向よが、二世までの
一二一一一一、二二一一一一
清音志あるくを事す、やにつけて事たゞ

まことに、あは程清らの觀世音を信
じたり、毎日持經あると、施主さ
う度わきり上支アキテそが難ハシタいふもを
難ハシタいふは、大悲也、
さうするに、有難や大慈大悲、

善、福の少無、實業亦能狀ヤハタガシ、善の善、乃
、正道どりや願くは無縁の慈悲ヤハタガシをたきて、
、かを引取アキテ、今すれ利益ヨリをアキテ、
、後生者取アキテ誰アシタがまんマタニ世セ乃
、アシタ室ムロ、アシタ大雪ヤハタガシ北極ヤハタガシ、
、高タカシあアシタ也マタ、或遭王難ヨウナク苦刑ギヤウヨウ、

終念彼觀音力刀尋般に懷カミ わき
ジユネトラジンダシエ

やげ少種を、独ソロウヤせを、五命ゴメイもたのり

うア我ワタシへ 実マサニくば、独圓ソリュウハ拘ハシルば、マサニ文モツ
乃乞マサニハ、マサニ人王羅シラバの、マサニ火カミよあふを、マサニはる

乃乞マサニよ壊ハシルき、又危惡ハシル惡ハシル退散タクサンといふ

文モツハ射スル矢ヤも其オよ立タチまドトモそれぞ

一て、勝ハシル於アリ母モトや、をあらマサニ金カネく令ヨウの為ヨリば
文モツを涌ヒラクるよれど、種シナギと該セキ無ムカシ地ジ獄ゴ、
鬼カニ畜ムツ生スル老シテ病アリ死スル苦シテ似シテ渾ムカシ冥ミニ令ヨウ滅スル
け文モツ乃ハシル如シテく、ア 諸セキこの無ムカシ怨ムカシ愁ムカシをもニ無ムカシ乃ハシル
ものうるハシルや乃ハシル難ハシルとタ 無ムカシの令ヨウも
おハシルまだ、日後生アリハハシルもトをきキテ

上
首を立山の清翁は法花一佛今西方
乃向る又妙婆示現志滿ひて我等が
為の觀世音三世比利童子^{チヨウジ}がく刑
戮よ迫き身乃誓ひよいと汝^ルをもや
盛り久^クの如^シもくつかれや
アム姉^{アムシマ}キヤサ^サ、睡眠の肉よ^{アムタハ}トホ
アム

下
柔蔓を纏ひてひけるそやあくみ難^ハ
候^ミ、^{アキ}引^シ脱^ハあうの鳥啼^イて、^{アキ}冥^モ幻^モの時
意^シ只今^{ナリ}、^{アド}まことあり^シよ^{アシ}待^{マフ}
け^テくる^トある^{キハ}是^シぞ^シ世^セを^カ首^シ達^ダの度^ヒふ
足^シ弱^ムと^シ立^オあ^ハ、^{アキ}武^シ前^{アヘ}後^カを^コみ
つ^ミ是^シも別^シまのあ^ハす^シ、^{アシ}達^モゆ^フる

盛

一一一一一 わき一一一一一
蓑翁よ 篠翁よ 篠翁のやうよのせ
一て一一一一一 わき一、一、一、 日上二一、一、二、二
由井乃汀よ 無事をなり 着物がある
一一一、三、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二
晴や。／後の世乃門出なるもん
わき二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二
上 抹由井の汀よとへりば 座敷を定め
ぬ草志をまくありゆへ 一て 盆久や
て 座よあり 清水の方ハ我るゝぞと 西ふ

向ひて飲むの、拂々と喝へて待ひまば
太刀太刀一、二、二、二、二、二、二、二、二
太刀えぬよぬりつ、膳舎食むの、下よ
すじ太刀振あぐれ、おひじふ、拂經乃先
眼よかきうま、たかへ一くる太刀を身にまば
ニよおきて、候ことある、すむれもいづるを
やさん おきくも思ひのかなれば、たゞ忙

盛

甲

おもとあされ居たり
いや、極のむき難ふ

わき
物著
感久薄
れよ感久
レトマニ
感久都
今來

かきのほ琴、あみの、
告あま、盤くよも、
あそ、も音おもて、
あらやえむとのは、
事にはいひ、
ひよが何をうかく
ゆへき、

今承あつた放逐を夢みてひけ
わき

はま、身をもれやうを清前まで生ずよや
上りて、吏不取正覺の法華、今以て始
あつた色志次達乃大燈比光いづく不
利の前なんん 上施るよあけ光明を
たのむ。因承約書におこなひ日彼四經

を修讀せしに取名け時乎、刑戮よをた
まをあつて、片時免る事もなく
して、初承より後夜の一晩を、梢迄と
て座りたり。にち、まくそくいまどろ
ざるにかうせんとあ一天、きてよめいあるう
ちよおもひだを、八旬よたけ珍ひぬと見
ヤアハ

へさせらるる老僧の香爐乃袈裟の衣をうけ
水鼎乃珠數をつまぐり鷲の杖よせか
じせん元すりて云ふ一トトニニニニニニ
法音妙聞也んたゞ一きほあうよて我も
洛陽東山乃清水のありよす汝うる
よありよるまキより大慈大悲の誓願
一トサトニニニニニニニニニニニニニ
あどうきかんは一音あり速も我を
ヤラハ

念する時君の王難乃災の道也
上三三二二日午ト、多年の真を持て、
脱汝年月

心人よあんぞう心易く思ふべ一亦
汝が令下に鶴もべーとのたまひてゑ則
是より、久しきもく思ひて歎歎乃
心限りありテ

は曉のひをあとと同一告そとあくたが
ば信感も限るすか やラ其時盛久は爰
乃さあたるゆべして 感波をとめぬつあ
を立々れば いに盛久志むとて
浦篇をあけて石るきふ 治方もある
盛久が 日下 月下 月夜のまを祝ふぞ

わき

と湯簾を下さるれば 上緋ひ世持也
ニキシタモ日上 月下 月夜のまを祝ふぞ
葉せむる 花を誇るを一たうあ

わき

わき

わき

わき

わき

わき

代乃侍武略のまき者 之亦礼節、禮能
の由、君ゆづらひずれり、一年、小松殿

北山草鶴路乃酒富すあひく主

馬乃盛久一曲、一うもでれ事、関東とも
隠きなれ、^{ヨリ} 狩更先ひ候び乃折なまくま
唯一指との五面をも乞ひそ仕りしゆの
何とば前より、舞をまへどりや ^{アキハ} 中て
の事 ^{アキハ} も難へ、^{アキハ} 清難きも時
を経て、^{アキハ} 命を盛久折る時豈よぬ

ふ事、せむつ隠き、^{アキハ} 流りあ
ひく時なれや、^{アキハ} 天は満乃うちのもう人
の國と、^{アキハ} 国乃本れわらあすが事を歎か
酒當あうとの事乃真、^{アキハ} くわぬ
日朝のどうふそ、^{アキハ} 君を移かみ秋の鶴づ
國乃、^{アキハ} 松れの散失ぞしてひあせづ
^{アキハ}

349
619

權作有



昭和十年十月廿五日印刷
昭和十年十月三十日發行

定價金五拾錢

著作者 寶 生 新

東京市下谷區上根岸町八十二番地

發行兼印刷者 江島 伊兵衛

發行所 下野寶生流謠本刊行會

なうあは急きあ運ヤクとつ狂りゆつ
かまつま退ハツメツあける盛久の心志消シヨウ
ゆヒれ

終

